

オーバードーズ

文鳥

顔が熱くなったり、胸が痛くなったり、動悸がしたり？

そんなのまるで病気じゃないか。いや、原因が相手にあるというなら毒の方が近いだろうか。法で裁けない、死に至る毒。可愛らしく頬を手で覆って顔を赤くした彼女と同調する少女たちに笑いかけながら、相槌を打つ。ご愁傷様。

「ごめん和希っ今日塾あるから先行くねまた明日っ」

「また明日、塾頑張るって」

挨拶もそこそこに昇降口から走っていく友達を見送り、自分もいつも通りに外に出る。校門を抜ける前にバスに間に合うか時間を確認しようと思い、携帯電話を取り出そうと鞆のポケットに手を入れる。けれど、差し入れた手には何も当たらない。信じられない気持ちで心当たりのある場所全部を確認して、思わず眉間にしわを寄せた。携帯が無い。スカートのポケットにも、鞆の中にも。念のためもう一度弄ってみたものの結果は変わらない。そこで思い出してしまふ、休み時間に教室の自分の席で友達と話していた時に、机の中にそれをすべりこませたことを。最悪だ。小さく呟いてしまい慌てて周りを見渡して、ほうと息を吐いた。早く帰りたいのと思いつつ校舎を振り返る。少し癖のあるショートボ

ブの黒髪が揺れた。薄汚れたクリーム色の壁に、人の気配のない昇降口。不幸中の幸いというべきか空はまだ青い。先生たちが見回りだすのはもうしばらく先だろう。ぼんやりとした教室の窓枠を眺め、アスファルトに伸びる影を踏み潰しながら歩き始めた。

コツコツとタイルを叩くローファアの靴底。存外響くな、なんて我ながらまるで他人事のように。少し前にしまったばかりの上履きを、背に書かれた「毒鳥」の文字を無感動に眺めながら取り出して、代わりにローファアをしまう。しばしのお別れだ。上履きに履き替えトントンと爪先を立てて慣らしてから廊下を進み、階段を上がる。小窓から踊り場に差し込む光は水に絵の具を一滴ずつ垂らすように変色しだしている。階段を二階分上がると首筋が少し湿り気を帯びていた。登りきってすぐに左に曲がり教室のドアに手をかける。電燈はついていないようだ。願いは大体叶わないけれど、どうか中に誰もいませんようにと願いながらカラカラとドアを開いた。はためくカーテンの向こうには熟れはじめた空。整然とした机と椅子の森の中に見えた人影に、一縷の望みが打ち砕かれたことを知る。教卓の前、そこに座る生徒は確か「水瀬」。話したことはないけれど、いつも周りに人がいて、弾むような声でそう呼ばれているのを聞いたことがある。けれど今は自分と彼以外は誰もいなくて、聞こえるのは紙の上をシャーペンが滑る音だけ。俯く彼の背中からはどんな感情も読み取ることが出来なくて、ドアを開ける五分前にそこに現れた

ようにも、何百年もずっとそこにいたようにも思えた。珍しいとは思わなくても、それだけだ。どうやらこちらには気づいていないらしく振り返るそぶりはなかった。自分の席は窓から二列目の前から二番目。できるだけ音を立てずに携帯を回収して、すぐに帰ろうと肩にかけた鞆を体に引き寄せた。

できるだけ自分の席までの距離が短く、かつ彼の席から遠いルートを選んで机と椅子の隙間を縫って行く。そうしてたどり着いた目的地の机の中に椅子の脇から手を差し込んで中を探ると、予想通り四角い板に触れた。胸をなでおろして、さっさと帰ろうと入れた時のように隙間から手と携帯を引き抜こうとして、衝撃音。やってしまった。探し物を手にしたことで緊張の糸が緩んだのか、椅子の背もたれにぶつかりガタリと音が鳴った。ほとんど反射で不味いと思うものの一度バラバラになったものは戻りはせず、侵しがたい静寂の破片だけが足元に散らばっていた。そろそろと顔を上げると振り向いた水瀬とぼつちり目が合ってしまった。彼の目が一瞬僅かに円くなり、もとのアーモンド形に戻る。本当は何事もなかったように適当に流すのが最適解だったのかもしれないけれど、それが出来なかったのは、彼の目が髪や肌の色素の薄さからすると意外なほどに黒かったからかもしれない。そうはいってもクラスメイトの目の色なんて考えたこともなかったのだけれど。

「あれ、どうしたの毒島？」

声落ちる。教室の床にゆっくりと波紋が広がって上履きを揺らした気がしたけれど、そんなことはあるはずもない。

「別に、忘れ物しただけ」

取り繕うのも面倒でそっけなく答える。本当ならとっくに帰っているはずの時間なのだ、これくらいは許してほしい。

「へえ災難だったね」

「…水瀬は、」

何してたの。好奇心が二割、社交辞令が七割、あとの一割は…：…なんだろうな。とりあえず一般的に華の女子高生が異性と話すような瑞々しさはない。尋ねると彼は驚いたような顔をした。それこそ、先程目が合った時よりも。理由がわからなくて、思わず首を傾げる。

「なに？」

「あーいや、急に名前呼ばれてちょっと驚いただけ」

ちなみに数学の課題やってた。そう言った彼の声が少し遠く聞こえる。…：…なまえだって？

予想外のことに疑問符を浮かべる私に対し、彼は可笑しそうに小さく笑いながらノートの表紙を向けてトントンと人差し指で右下を指した。示されるままにそこを見ると、「薬師 水瀬」の文字。

「…：…ごめん名字だと思ってた。」

まさか名前だったとは。そういえば聞いたことのある名字ではあるが、よもや彼のものだったとは知らなかった。

「はは、いいよ。よく間違えられるし、結構珍しいしね」

「そうなんだ。まあ私も人のこと言えないけどさ」

「確かに毒島もあんまりいな。」

「それもあんだけど名前の方。かぎって女子だと少ないから男子だと思

われる」

親がくれた名前に文句を言うつもりはないけれど、初めて会った人にいちいち驚かれたり、訂正しなくちゃいけなかったりするのは面倒だ。

「でもいいね。何といても薬と水だし」

他意はない。少なくとも毒よりいいだろう。どちらにも人に必要なものだ。羨ましいわけではない、ただ似合うなと思った。

「ありがと、毒島もいいと思うよ」

どうせ強そうだとでもいうのだろう。記憶の片隅で名前も覚えていない誰かが絞り出した台詞を思い浮かべた。

「毒ってものと使いようによっては薬になるでしょ。それに毒島の名前の漢字って中和とか希釈に使われてる字だろ。」

咄嗟に反応できない私に、そうだよな？と呟いた彼がぱちりと瞬きをした。案外長い睫毛から星が散る。その仕草が妙に幼く見えた。これ以上彼が何かを言う前に帰らなくてはと脳が警鐘を鳴らす。こういう勘は悪いことほどよく当たるし、往々にして避けることは難しい。もう帰ると切り出す切欠を探しているのを知ってか知らずか彼は非情にも口を開いた。

「どっちも薬でなんかお揃いみたいだな」

ぐらりと地面が動いたような錯覚。あ、駄目だ。不快感ではない。けれど、おそらくもつと性質の悪い何かだと、本能じみた何かが言う。

「ごめん嫌だった？」

「…別に」

「ならよかった」

こんな笑い方をするのか。こんな、勘違いしてしまいそうなほどにあげなく。混じり合うことなく赤と青を内包した光に照らされる教室の中、黙り込んだのを不思議に思ったらしい彼が何かを言おうとしたとき、数秒のノイズの後にこのクラスの担任のやる気のなさそうな声がスピーカーから聞こえてきた。

「……そろそろ施錠の時間みたいだし帰るわ」

「そっか、俺は先生来るまで粘ろうかなと。じゃあな」

「じゃあね」

この機を逃す馬鹿はいない。ひらひらと小さく手を振る水瀬に別れを告げる。背筋を伸ばしいつもより少し大きめの歩幅で扉の前に移動する。廊下に出る直前に振り返ると、水瀬はまたものようにノートに向かっ

ていて、シャーペンの音だけが沈黙の中で息をしていた。

廊下と階段を来た時とは逆に辿る。コッソ。踊り場に降りた時、何かを蹴飛ばした。しゃがんで拾い上げると、それは消しゴムだった。小さくて丸っこいそれは誰の名前も書かれていない。落し物だろうか。そうであるなら明日にでも先生に渡そう。何であれ手放すなら早ければ早いほどいいのだから。そう思いながらポケットに消しゴムを入れる。顔を上げると壁にある鏡に映る自分と目が合った。嗚呼気づかなければよかったな。ポケットの中の消しゴムがずしりと重くなる。鏡に近づいて、嘲るように笑って見せた。

階段を降り切った後、何だか少し暑いから飲み物でも買おうと昇降口

の自販機の前に立ち、お金を入れる。少し迷って天然水のボタンを押し
た。ガコンと落ちてきたペットボトルを取りだして蓋を開ける。冷たい
ボトルが火照った掌に心地いい。一気に三分の一ほど飲んでから蓋を閉
めて鞆に突っ込み、外に出る。今度こそ校門をくぐり、帰路に就いた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

「おかえりー」

学校からバス停まで徒歩五分。バスに揺られること三十分。降車して
からまた歩くこと十五分。家の玄関を開けると母と弟の声が重なって聞
こえてきた。まだ帰ってきていないのか父の革靴は見当たらない。

「もう少しでご飯できるからね」

「はーい」

「ねーちゃん辞書貸してくれない？」

「いーよ。晩ご飯の時に持ってくる」

「ありがとう」

台所と居間から聞こえてくる二人の声にそれぞれ答えてから洗面所
で手を洗い、玄関からすぐにある階段を上って自分の部屋に入ると扉を
閉めた。部屋の中は真っ暗なので手探りで電灯のスイッチを押す。こう
いう時に躓いたりしないから物が少なくてよかったと思う。ふと横目で
ベッド横の窓辺を見ると、小さな鉢で観葉植物が項垂れるように緑色の

葉を垂らしている。その名前は忘れてしまった。鞆からペットボトル
に入った天然水を取り出して一口飲んだ。のどを水がすうっと流れる感
覚はすぐに終わり、胃の中で混ざってわからなくなった。ベッドに乗っ
てペットボトルを傾け、もう残り少ない中身を観葉植物に向かって注ぐ。
早送りするみたいに色褪せて枯れはしないかと思ったが、艶やかな葉の
上を水が流れ、その先から滴が落ちただけだった。すっかり軽くなった
それを持ったまま、ぼふつと音を立てて仰向けに寝転がる。制服から着
替えなければと思うけれど億劫で、右手の甲を目元にあてる。マツト
レスから逆流して伝わる心臓の音の煩さに、自分が間違っていたことを
悟った。

彼が薬だって？冗談じゃない。

彼は毒だ。とびきり強力で遅効性の甘い毒。

水瀬は毒は使いようによっては薬になると言った。ならば、その逆もま
たしかりだろう。そういえば、ネットか本かどこで見たのかは覚えてい
ないけれど、薬だけでなく水でも中毒になるのではなかったか。顔が熱
い、きつと薬と水を過剰に摂取したせいで、それらが毒に転じたのだ。
それなのに気づきもしないとは本当に酷い人。ふと、ポケットに入っ
ている消しゴムを思い出した。この気持ちも消せてしまったら楽なのに。
けれど、そんな簡単に消せはしないことは、自分が一番わかっているん
だ。頑張るのは柄じゃないけれど、今回ばかりはそうも言っていられな
いようだ。

「今に見てろ……」

毒には毒で返すのが礼儀というものだろう。盛るのならば盛られる覚

悟がないとは言わせない。彼には自分が盛られたものと同じ毒を盛らなくて気が済まない。薄めてなんかやらない、中和なんでもってのほか。薬になんてなれなくていいからそのうち彼に殺害予告でもしてやろう。でも今はまだこのままでいたかった。これではもう友達のことを言えないな。でも、もしかしたら今度はあの女の子たちに相槌以外に何かを返せるのかもしれない。

症状は発熱、胸の痛みに動悸。解毒薬なんてありはしない。血流にのってじわじわと全身に回って心臓が侵されたら、もう、終わり。